

北陸大学図書館報

Bulletin NO.44

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第17回読書感想文コンクール講評

⇒ 第17回読書感想文コンクール 審査結果発表

⇒ 第17回読書感想文コンクール 審査委員から一言

⇒ 二次資料検索・電子ジャーナル講習会開催、電子ブック

⇒ 図書館公開ホームページ、寄贈図書

北陸大学図書館報

NO.44



◆◆ 第17回読書感想文コンクール講評 ◆◆

経済経営学部教授

読書感想文コンクール審査委員長 南谷 直利



第17回北陸大学読書感想文コンクールを実施し、全学部からの370名の事前登録と229編の作品応募がありました。登録や応募をした学生の皆さんと大学教員・職員・関係者の方々に感謝しています。ご参加とご協力を頂き、誠にありがとうございます。

皆さんにお伝えしたいことは沢山ありますが、審査結果と表彰式について、述べさせていただきます。

I 「審査結果」

読書感想文コンクール審査委員会では、2次審査の方法を次のとおり変更しました。①従来の5点法から10点法に変更し、4人の審査委員の合計40点満点とする、②学部・氏名等の情報を伏せて、作品の本文だけで審査する、ことを準備し行いました。審査結果では、最優秀賞と優秀賞1編との差が1点、優秀賞2編同士の差も1点であり、僅差となりました。作品応募者の主体性（自己が全力を出す）とメッセージ伝達力が優れていて、40点満点で点数化しても小差となります。そして、入賞をしなかった作品にも多くの感動があり、応募者には今後も継続してコンクールに参加して頂きたいと熱望しています。

II 「表彰式と賛助企業」

2018（平成30）年1月17日（水）図書館本館ソフィアルームにおいて、読書感想文コンクールの表彰式が挙行され、竹井巖図書館長から19名の入賞者に表彰状と副賞の図書カードが授与されました。

表彰式には、柴田宏医療保健学部長、油野友二医療保健学部教授、読書感想文コンクール審査委員、図書館委員の方々のご出席を頂き、恙無く行われました。本が好きな出席者が全員で記念撮影を行い、「学生ファースト」とする本学の学風を感じる良い一日でした。

また、入賞者及び関係者の皆様に、と近岡修氏（前松雲友の会会長、株式会社ナルックス取締役社長）からご提供頂いた新年福袋（清涼飲料、お菓子、食料品等の詰合せ）を心を込めて全員にお渡ししました。これは今年度が初めてのことであり、近岡氏と株式会社ナルックスの皆様のご支援に心から厚く感謝し、お礼を申し上げます。

※この続きは「ふくろう便り」VOL.2に掲載します。

第17回 読書感想文コンクール 審査結果発表

応募作品229編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞

高見 明里 はなちゃんのみそ汁 (国) 1年

優秀賞

瀬戸 彩乃 ホセ・ムヒカから学んだこと (国) 1年

神田 七瀬 『人間失格』を読んで (医) 1年

佳作

泊 春佳 『たったひとつのたからもの』から感じた事 (薬) 1年

喜多 裕香 おおかみこどもの母から学ぶこと (医) 1年

木下 裕理 命の重さ (医) 1年

吉川 葵 心の習慣 (医) 1年

努力賞

北島 萌々香 病気がくれたメッセージ (薬) 1年

小松 優花 情報を得るとのこと (薬) 1年

田篠 夢果 謎で始まり謎で終わる (薬) 1年

澤本 直樹 生きるとは (未) 3年

比嘉 彩乃 『伝える力』池上彰 (未) 3年

久保 智美 カラフル (未) 3年

中屋 智晴 『夏の庭』を読んで (未) 2年

荒木 菜摘 『君の臓腑をたべたい』を読んだ感想文 (医) 1年

澤野 雛子 寄生虫と歩む人生 (医) 1年

寺田 早良 大切な人を看取る作法 (医) 1年

山田彩千乃 夜の底は柔らかな幻 (医) 1年

山田緋華理 「死」への向き合い方 (医) 1年

* (薬)は薬学部、(国)は国際コミュニケーション学部、(医)は医療保健学部、(未)は未来創造学部です。



表彰式 (平成30年1月17日)

国際コミュニケーション学部 1年次生 高見 明里



書名 はなちゃんのみそ汁
著者 安武 信吾 千恵 はな
出版社 文藝春秋

「癌になっただけでも苦しいのに、癌という病気は、なった後の方が苦しいことが多いんだな。」これは、私が最も印象に残っている言葉です。なぜ彼女は「癌になっただけでも苦しいことが多いんだな」と言ったのでしょうか。それは癌を患ったことがある人、患っている人とその関係者、そしてこの本を読んだことがある人にしか分からないでしょう。きっと、皆さんが「癌患者」と聞いて真っ先に思い浮かぶのは「可哀想」や「抗がん剤治療、闘病生活が大変」と言う言葉ではないでしょうか。この本を読み終える前の私はこの様にマイナスな言葉しか思い浮かびませんでした。ですが、今は以前とは異なり「強いな」と思います。本当に完治するのか、もしかしたらと最悪の事態をもが頭を過ぎり毎日が不安でいっぱいであるのにも関わらず、常に前向きに過ごしているからです。

しかし、これほどまで強い彼女たちも「同情される度に自分が癌であることを再認識させられる」と書いてあったように、私たち周りの人は配慮であり、善意で特別扱いをしているつもりが、それはかえって私たちが気付かないうちに彼女たちを傷つけていたと知り、とても申し訳ないことをしていたんだなと思いました。人は誰もが苦しい時、辛い時があります。しかし、人はそれを少しでも早く忘れようと記憶から消そうと努力します。きっと彼女も自分が癌であることを意識せずに過ごそうと心掛けていたと思うからです。「男女に関係なく、癌になったというだけで、職場からのひどい仕打ちや、解雇される人だっただくさんいる。癌という言葉自体が、差別用語としてまかり通ることもある。」この言葉の通り、実際に彼女自身もある日、校長室に呼ばれ「フルタイムで働くのはどうかと思う。非常勤で働いてみては」と提案されました。これに対して、彼女は首を振り「今までと同じように働かせてください」と切願しましたが、彼女の意見は通らず、週3日の勤務辞令を受けました。この場面を読んだ私は「癌患者は自分が癌であることを隠したがる」と言う言葉が思い浮かびました。これまでの私は、なぜ隠したがるのだろうと不思議に思っていました。癌患者にしか痛みの分からない差別が自然と社会にあったからだと思いました。もし、私が彼女の立場に立ち、癌であることを隠さなければ皆と同じように接してもらえないとしたら、私は必死に隠します。彼女が「癌になっただけでも苦しいのに、癌という病気は、なった後の方が苦しいことが多いんだな。」と言った理由の1つは闘病生活でもありますが、私はこの本を読み終えた時に、彼女が苦しいと感じる1番の理由は、ただ癌になってしまったと言うだけで周りの人の目が冷たくなったことだと思いました。

私たちは癌患者が癌になってしまったことを包み隠さず過ごせる社会を作るべきだと思います。そのためには、私たちは癌という病気について、また闘病生活について正しい知識を持つべきだと思います。そして、私は彼女が健康のために、しっかりと食事をとり、好きなことに熱中し、たくさん笑うことが大切だと書いてあったので、この3つを特に気にかけて過ごしたいと思いました。この3つは心の栄養分でもあり、生きる上で大切なことを彼女は再認識させてくれました。これからの人生、嬉しい、幸せだと感じる事がたくさんあると思います。また、反面に辛い、悲しいと感じる事もあると思います。そして、これまでにぶつかってこないような高い壁にぶつかって落ち込んだ時には彼女の「なーん、くよくよしようね。人生がもったいないまい。」と言う言葉を思い出して何事にも挑戦し続けたいと思います。そして、失敗した時こそ物事をプラスに考え、成功した時にはたくさん笑って幸せをかみしめたいです。

国際コミュニケーション学部 1年次生

瀬戸 綾乃



書名 世界でもっとも貧しい大統領ホセ・ムヒカの言葉
著者 佐藤 美由紀
出版社 双葉社

私は『ホセ・ムヒカの言葉』という本を読んだ。みなさんはホセ・ムヒカという人物を知っているだろうか。この人物は世界で最も貧しい大統領で知られており、2012年のリオ会議で衝撃的なスピーチをし、世界中に感動を与えた人物である。

この本の中にはホセ・ムヒカがスピーチの中で語った多くの名言が書かれている。私はこの本の中で三つの名言が特に心に残った。一つ目の名言は「ものであふれることこそが自由なのではなく、時間であふれていることこそが自由なのです。」という台詞である。私たちは欲しいものを買う時、お金を貯める。人がものを買うとき、お金で買っているのではなく自分の人生の中の時間で買っているのだと分かった。自分の大切な人生の時間を自分の欲しいものを得るために働く。そうすることで自分の自由な時間が削られていく。また、ものが増えていくということは地球問題にも直面することになる。この一文は簡単に書かれているようで深く考えていくと様々な考え方が浮かび上がってきて素晴らしいと感じた。

二つ目の名言は「人生はもらうだけでは駄目なのです。まずは自分の何かをあげること。どんなにボロボロな状態でも、必ず自分より悲惨な状態の人に何かをあげられます。」という台詞である。私がこの文章から感じたことは、受け身になっているだけではなく自分から行動していくことが大切であるということである。戦争の地域で食べ物がなく、学校にも行けない子供たちが世界には多くいる。ニュース番組や新聞でよく見かけ、そういう子供たちや人々のためにできることはあるだろうかとその記事を見るたびに思う。しかし思うだけではいけないのだと分かった。「かわいそう。どうにかしてあげたい。」いつもそう思うばかりで行動に移せていない自分がいることに気づかされた。

三つ目の名言は「壁をつくることで、国民は政治から離れていきます。もっとも良くないことは、国民から政治が嫌われること。そうなると政治は失敗に終わります。」という台詞である。この文章が伝えたいことは政治のことだけにとどまらないと思った。人間関係もそうである。見かけや外見だけでその人を判断し、自分から壁を作ってしまうことで相手が自分と仲良くしたいと思っていてもそれ以上良い関係にはならない。人種差別もその一つである。「イスラム圏の人だから危ない」そういった固定観念は違う。国や地域、見た目や言語、考え方が違ったとしても同じ人間ということには変わりはないのだから壁を作る必要は一切ない。

私はこの本を読んで今まで自分が気づかなかったところに気づくことができた。人は確かに便利だと思うものを得たいと思う。例えば、携帯電話ひとつで遠くにいて会えない人と話すことができるし、分からないことがあるとすぐに調べることができる。そんな便利なものを手にしてしまった私たちには忘れ去っているものがある。それは、家族や友人と過ごす時間である。LINEやTwitterといったSNSで繋がるのがコミュニケーションを取っていることになるのだろうか。確かにやり取りをしているので一見、コミュニケーションを取っているように見えるが、私が思うコミュニケーションではない。コミュニケーションを取ると言うことは、直接面と向かって話し、その人の表情や話し方、雰囲気なども含めて話すことがコミュニケーションを取ると言うことだと思ふ。会って話すことで文章だけでは伝わらないことも伝えることができる。SNSに特化するのではなく直接会って話すことが大切なのだと私は思う。また、人と人が関わることで暖かみが生まれる。現在、金沢駅では改札口が駅員さんではなく機械になった。私が毎日、その改札口を通るたびにどこか寂しい気持ちになる。以前は駅員さんが「おはようございます。ありがとうございます。」と大きな声で挨拶をし、切符を受け取っていた。機械になることで便利だと思うこともあればそうでないこともある。人と人がコミュニケーションを取り合うことはそこに笑顔や楽しいと思う感情だけではなく、目には見えない「暖かさ」というものが生まれるのだとこの作品を読んで気づかされた。

医療保健学部 1年次生 神田 七瀬



書名 人間失格
著者 太宰治
出版社 角川書店

『人間失格』を読んだ私の友人たちや中学校の時の教師は皆総じて「鬱な気持ちになる」、「気分が沈んでいるときは絶対読まないほうがいい」と言っていた。私はそんなに暗い話なのかと興味を持ち、読んでみようと思った。

この小説は大庭葉蔵という男が極度の人間恐怖により常に人の顔色を窺っていた幼少期からその人間恐怖によって狂わされ、最終的に廃人同然のようになっていく様を描いた小説である。

読了直後は確かにどんよりとした気持ちになった。しかし、大庭葉蔵に共感できる部分もいくつかあった。たとえば、幼少期の葉蔵が下男に連れられて父の属していたある政党の有名人の演説会に行った時のこと。聴衆、特に父と親しくしていた人たちは皆、大いに拍手などをしていて。しかし、演説が終わり家路につくとき、聴衆はこの演説会の悪口を言うのだ。中には父と親しい人の声も混じっていた。それなのに、その人たちは自分の家に立ち寄り、今夜の演説は大成功だったと、しんから嬉しそうな顔をして父に言っていた。という場面があった。これと似たような経験を私もしたことがある。たとえば、中学に入ったばかりの部活動のこと。部活動中、同級生のある部員が用事で少し抜けると、その人の悪口を言いだした。先輩ならまだしもそこにはその人と仲が良いと思われていた同級生も混じっていたのである。しかし、その人が戻ってくると悪口を言っていた同級生はなんともないような声で「おかえり」と言っていた。当時の私はこんなことはドラマや漫画などフィクションでしか見たことがなかったのでとても衝撃的だった。また、私はそこではじめて現実の人間も演技をするということを知ってしまった。それにより、気が小さかった私は人間がとてつもなく怖くなり、自分では親しいと思っていた友人までもひそかに疑うようになったのを覚えている。そして、疑い続けるあまり自分を隠してしまい中学卒業間近には友人といえる人がいなくなってしまったのは苦い思い出である。さらに衝撃的だったのは悪口を言われていた方もそんなに悪口を言った方は好きではないらしい。互いに嫌いあっているくせに仲が良い演技をしていたということを知った。この二人は互いに嫌いあっていたことは知っていたのかはわからないがとても滑稽である。

このようなことに対して葉蔵は、「互いにあざむき合って、しかもいずれも不思議に何の傷もつかず、あざむき合っている事にさえ気がついていないみたいな、実にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信の例が、人間の生活に充満しているように思われます」と称している。私は葉蔵の時代の人間も現代の人間も大して変わらないと思った。昔から人間は演技しながら生きているものだと私は簡単に受け入れていた。しかし、葉蔵はあざむいていながら、なぜ平気な顔して生きていられるのかと受け入れられないようだ。

でも、私から見ればなぜそう思いながらも無理に道化を演じ続けたのかがわからない。そんなに人間を理解しがたければ、もういっそのこと道化を演じず独りで生きていくという選択肢もあったはずだ。もしかすると葉蔵は人間を理解することができないということが罪であり恥であるとでも思っているのか。確かに葉蔵の人生は大体周囲の人を理解できないと嘆きつつ道化を演じている場面が多い。それが恥だとすれば、この世の中、大体の人が恥ずかしい人になってしまう。

葉蔵はこの人間に対する恐怖を分かってくれる人に出会っていればもう少しまともな人生を送ることができたのかもしれない。葉蔵は恐怖から逃れるために酒や女におぼれたり、心中しようとして女だけ死に自分は生き残ったり、最終的に薬物中毒になり脳病院に連れていかれたり同情しかねる男だが、分かり合える人に全く出会わないのは少しかわいそうだと思った。そう思うと高校に入って改めて分かり合える友人ができた私は幸運なのかもしれない。少なくとも中学校生活より高校生活のほうがずっと楽しかったと言える。その友人に感謝しながら今後も付き合っていきたいと思う。

◆◆ 審査委員から一言 ◆◆

今回読書感想文コンクールの審査をして、入賞したかどうかにかかわらず、多くの参加者が読書を通して様々な面で成長したことを感じることができました。感想文の題材として選ばれていた本は、映画になったりメディアで取り上げられたりして最近話題になった作品が多く、同じ本の感想文が複数あったものもありました。そういう形で読書に関心を持つ人が多いのでしょう。そのような作品をきっかけに、いわゆる「名作」に関心を持つ人が増えていけばいいのではないかと思います。長い年月を通して読まれ続けている作品にはやはりそれだけの価値があります。最近話題になっている本の中にも、時の試練を経て、そのような作品であることが将来証明されるものがあると思いますが、無数にある本の中から価値ある作品を選び出すためにも、年月を経て生き残ってきた本を読んでみるのが役立つでしょう。感想文コンクールに参加された皆さんが、今後も読書の経験を積み重ねていくことを期待しています。

(轟 里香 国際コミュニケーション学部准教授)



今回のコンクールにおける私の審査ポイントは2つ。「感想文の筆者が本から受けた影響や自分の心情の変化を、どれだけの熱量を持って私に訴えてくるか」「必要以上にあらすじを書かずに1つ目のことができていないか」でした。その点で上位3編はまさに私の“ツボ”で、「私も是非読みたい!」と思わせてくれました。

実は3編のうちの1冊は、私が中学の時だったと思いますが、夏休みの宿題として私も感想文を書いた本でした。当時は30歳以上の自分が全く想像できず、「もしかしたら主人公(≒作者)と同じことしちゃうんじゃないだろうか」という漠然とした不安、あるいは「若さゆえ」の憧れを持ったことを、今でもはっきりと覚えています。その後はそんなセンチメンタルなことは忘れて日々を過ごしつつも、書名を耳にするたびに“その感覚”を思い出したので、ある意味、反面教師として私をずっと支えてくれていたのかもしれない。こんなに印象に残り続けたのは読書感想文を書いたためだったのかもと思うと、読書感想文を書くことの効能が、今更ながら理解できたような気がしました。

今回の入賞作品の本はすべて北陸大学図書館にあります。今、このページを読んでくれているあなた、仲間の書いた読書感想文に触発されたら是非どうぞ!

(倉島 由紀子 薬学部講師)



初めて読書感想文の審査をしましたが、とても楽しい時間を過ごせました。こんな素晴らしい感想文を書けるのかと作文能力に感心しました。特に最優秀賞は、感想文を読み終えてから本のタイトルを見て驚きました。それは、内容も良かったのですが、多くの読者が受け止める点とは異なった視点で感想文を仕上げているからです。他人とは違う視点で物事を見ることができることは、素晴らしい感性の持ち主に違いないのです。

また、“そんなにお勧めなら読んでみようか”という気持ちにさせる文章も、良い読書感想文の一例です。一方で、本のストーリーや登場人物の説明が長い文章はつまらないものになってしまいます。読んで面白いと感じる文章を書ける人は、相応に読書をしているに違いないです。文章を書くことが苦手な人は、まず短編でも新聞のコラムでもいいので自分の好きな世界と一致するものを探してみることをお勧めします。そして、自分もこんな文章を書いてみたいと感じればしめたものです。

(滝野 豊 医療保健学部講師)

◆◆ 二次資料検索・電子ジャーナル講習会開催 ◆◆

平成30年3月1日(木)及び2日(金)に、図書館薬学部分館SA室で二次資料検索及び電子ジャーナル講習会を開催しました。1回45分として6回開催し、全部で38名に参加いただきました。

参加者は主として薬学部4年次生で、図書館職員が二次資料(SciFinder・医中誌Web・PubMed・Google Scholar)の検索方法及びその検索結果からSFX(リンクリゾルバ)を経由して電子ジャーナルへアクセスする方法等について説明を行いました。

受講した学生の皆さんからは、次のような感想がありました。

「5年次生からの研究活動にあたって知っておくべき二次資料の検索方法を丁寧に教えていただいたので、とても有意義なものであったと思います。プリント資料だけでなく実際にPCを用いて操作しながら説明を聞くことができ、理解しやすかったです。学生はぜひ受講すべきだと思います。」

「論文検索は研究を行う上で絶対必要なので、検索方法を知ることができて良かったです。丁寧に教えていただき、ありがとうございました。」

「図書館のホームページに論文検索サイトのURLが載っていることを知ることができ、とても有意義でした。実際にPCを用いて教えていただき、分かりやすかったです。」



なお、今回の講習会に参加できなかった皆さんには、別途開催しますので、希望日時を薬学部分館までお知らせください。できる限り対応します。

◆◆ 電子ブック ◆◆

丸善雄松堂の電子ブック「Maruzen ebook Library」の購入タイトルが増えて、現在は104タイトルの本文閲覧ができるようになりました。図書館公開ホームページの「電子ジャーナル/ブック」ボタンから利用できます。リモートアクセスの申請により、自宅や外出先からでも閲覧できますので、とても便利です。



「Maruzen ebook Library」以外にも、「KinoDen(紀伊國屋書店学術電子図書館)」やElsevier社の電子ブックの閲覧ができますので、大いに利用してください。

◆◆ 図書館公開ホームページ ◆◆

2017（平成 29）年 11 月に、北陸大学図書館公開ホームページが新しくなりました。これまでのホームページからデザインを一新し、ほとんど全てのコンテンツをホーム画面に表示しましたので、調べたい項目がすぐに分かります。最新のニュースも随時掲載しています。下記はパソコンの画面です。スマホの画面は若干異なります。今後、内容の充実を図っていきますので、ぜひご活用ください。

寄 贈 図 書

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄贈者
『羊をめぐる冒険』 他 計 47 冊	泉 洋成 (理事)
『医は不仁の術 務めて仁をなさんと欲す』 他 計 8 冊	三浦 雅一 (理事・薬学部教授)
『もうひとつの道德の教科書』	東風 安生 (経済経営学部教授)
『立山信仰と三禅定』	福江 充 (国際コミュニケーション学部准教授)

北陸大学図書館報 NO. 44 平成 30 年 3 月 30 日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘 1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ <http://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>